



創刊号・クジラと泳げる海スペシャル

Part 2

オーストラリア・メルボルン近海

BLUE WHALE

Photo&Text
Takaji Ochi

現存する地球最大の生物、シロナガスクジラと水中で出合える可能性のある海があるらしい。そんな、わずかな情報をもとに、半信半疑のまま、オーストラリアのメルボルンを訪れた。過去、空からのリサーチで、1日に40頭もの個体が確認された事もあるというガイドの話に、期待が膨らむ。はたして、その結果やいかに。

地球最大の生物、シロナガスクジラ衝撃遭遇体験記



地球最大の生物を求めて

おんぼろの小型セスナは、海岸線から約10マイル(約16km)沖を飛行していた。彼方に、荒涼としたオーストラリア南部の海岸線が続いている。眼下にはいつも自分が見なれている、トロピカルブルーの海とは明らかに異質の海が広がっている。「冷たそうだな..」。パイロットとの交信用マイクを口に当てたまま、僕は小声でつぶやいていた。はたして、この大海原で、本当にシロナガスクジラが見つけれられるのだろうか？自分で言うのも何だが、動物運が強くて普段はあまり遭遇できるかどうかなんてあまり気にしなくても、目的の生物に会ってしまう事が多い。しかし、今回は正直多少弱気になっていた。

それもそのはず、シロナガスクジラ撮影のために、オーストラリアはビクトリア州の州都、メルボルンの地に飛行機で降り立ってから、すでに、この日で4日目を迎えていた。にも関わらず、まだこの時点でほんの一瞬もクジラの姿を見ていなかったのだ。救いなのは、到着して4日間、毎日クジラの搜索をして会えていなくて、この日まで風が強く、海に出れない状態が続いていただけで、実際にクジラ搜索に出たのは、

Special Thanks **West Australia Travel & Dive Centre**

この日が初日という事だった。残りの取材日程は、この日を含めて、あと3日間。そう簡単に会える生物では無い事は十分に承知している。しかし、この取材は、『シロナガスクジラを水中で見る』ツアーとして、この短期間で一般のゲストでもクジラと遭遇できる可能性をリサーチするためのテストケースでもあるために、あえて1週間という短い取材日程を組んだのだ。



「ブルーホエールだ!あそこにいる!」 僕の不安をよそに、 最初のクジラは約30分程で見つかった



(左上)空撮に使われた小型セスナ機
(左下)陸路搬送したボートを港に降ろしクジラ捜索に向かう



シロナガスクジラは全長30mに達する地球最大の生物だ

全長30mにもおよぶ地球最大の生物、シロナガスクジラとの水中遭遇を企画したのは、西オーストラリアを中心に、テレビロケなどのコーディネートを手掛けている、西オーストラリアトラベル&ダイブセンターの高島雅之氏。そして、そのパートナーとして、実際にオペレーションを行うのは、現地でのシロナガスクジラの撮影などを行っているオーストラリア人ビデオグラファーのロブ・トレリ氏。彼は、ケージ無しスキングダイビングでのホオジロザメやタイガーシャークの撮影を行った経験もある、大物海洋生物撮影のエキスパートだ。

彼からの情報では、この近海で、上空から目撃されたシロナガスクジラの最多個体数は1日に約40頭。エリアとしては、メルボルンから西へ車で約4~5時間移動したポートランド近海、海岸線沿い約150kmの範囲での事だという。それにしても40頭というのは驚きだ。しかも、それは昨シーズン(2004年)の3月の事らしい。この海域でのシロナガスクジラのシーズンは、毎年11月頃から4月頃まで。今シーズンに入っ

てからも、2004年11月に約25頭が1日に目撃されたという記録がある。それ以外の時期はどこに移動しているのかはまだわかっていないそうだが、このエリアに集結したシロナガスクジラは、ほぼ水面下まで沸き上がってくる、大量のクリル(krill=オキアミ)の捕食を行っているのだという。「世界中でシロナガスクジラが見れる海は約10箇所、その中で水面下での捕食シーンが見れる場所となると、3箇所ほどに限定される。しかも海岸線から程近い場所となると、おそらくこの海域が一番見やすいと思う」と、遭遇率の高さを確信するかのように、ロブは語った。

シロナガスクジラ発見!

「ブルーホエール(シロナガスクジラ)だ!あそこにいる!」パイロットの右に座っていたロブの声が交信用のヘッドフォンから聞こえて来た。彼のすぐ後ろの席に座っていた僕は窓に顔を一杯押し付けて、眼下に広がる海を覗き込んだ。ポートランドの空港から飛び立ったセスナは、しばらく西を目指して飛行を続け、

僕の不安をよそに、最初のクジラは約30分程で見つかった。

決して透明度が良いとは思えない群青色の暗い海に、水色がかった灰色の巨体が姿を見せた瞬間、僕はすでに400mmレンズのついたカメラを顔の横に固定して握りしめていた。さすがは地球最大の生物、その勇姿は上空からでもはっきりと確認できた。

シロナガスクジラの側には、オーストラリアアザラシや、上空からでは種類の確認はできないが、イルカの群れ、それにカツオドリやアホウドリなどが群がり、大型の魚たちに追い上げられて、水面まで上がってきたベイトボールと呼ばれる小魚の群れに向かって激しく捕食活動を行っていた。クジラたちは、そのベイトボールの周囲を旋回しながら、何度も何度も巨大な口を広げてクリルを捕食していた。この日、上空から目撃したシロナガスクジラの数も3頭。

南緯38度11分30、東経140度41分43。クジラの位置を確認し、しばらく上空から観察した後、空港に引き返した。クジラがいた海域は、ポートランドからさ

らに車で西に1時間程移動した東オーストラリア州の漁村、ポートマクドネル沖合約16km。陸路、メルボルンから運んで来たスピードボートをその港まで運び、いよいよ海上からのクジラ捜索が始まった。

海上からの捜索開始

空からシロナガスクジラとベイトボールを確認した位置は、スピードボートで約30分の距離。昨日から風がおさまり、波は穏やかになってはいたものの、外洋に出ると、まだ大きなうねりが残っていて、捜索、撮影に関してベストな状態とは言えない。目的地に到着すると、アザラシやイルカ、カツオドリなどが海上のあちこちに散乱しているのが確認できた。どうやら午前中に見た激しい捕食はおさまっているようだ。

それでもまだこの海域にこうして残っているということは、また小魚の群れが水面下まで上がってきて、捕食が始まる可能性は十分にある。僕は目を凝らして、水平線を見回した。

ロブは、捕食中のシロナガスクジラはしばらく同じ海域にい続けると推測している。午前中のフライトから、すでに4時間程が経過していたが、この海域でクジラを探す事にした。しばらくの間、ブローを求めて水平線に目を凝らす。しかし、巨大なうねりの底に入ってしまうと、まったく視界が遮られてしまう。ザトウクジラなどと違い、ブリーチングやテールスラップなど、激しいパフォーマンスをまったく見せてくれないシロナガスクジラを見つけるには、ブローに頼るしかない。それでも、数分後彼方にブローを発見した。「ブローだ、あそこ！」僕が叫ぶと、「間違いはないか！」とロブが問い返す。遠かったため、100%の確信は持てなかったが、このままぼーっとしているよりは良いと思い「多分」と答えた。ボートは僕が指示する方向へとゆっくりと移動を始めた。

しばらくすると、再びブローが上がる。今度はロブや高島氏も確認できたようで、スピードを上げて接近を開始した。かなり近くまで接近、ブローだけでなく、浮上した時に体の割合に比べて小さな背びれもしっ

かりと確認できる距離まで近付いた。ボート上からの撮影にも成功。しかし、なかなか海に入る距離までは近付かせてくれない。

結局この日はボートでも3頭のクジラを目撃することができたが、水中に入る事はできなかった。水中に入って撮影するには、まだコンディションが十分でないというロブの判断だった。

水中遭遇ラストチャンス

翌日、午前中はまた風が出ていたので、搜索を諦め、今回の撮影に協力してくれた研究者からの情報で、ポートランド近くの海岸に流れ着いたマッコウクジラの死体を探しに行った。海岸線を歩くこと約6km。海藻が打ち上げられるビーチに、ひときわ巨大な固まりが打ち上げられていた。しばらく日がたっていたのか、皮膚は白くひからびている部分も多く、テール部分は小型のサメに噛まれたような箇所が無数にあった。すでに研究者たちによって、皮膚の一部などが採取されている後だった。



(左)セスナの助手席のドアを取払い全開にして撮影 (右上)打ち上げられたクジラのサイズを計る (右下)飛行エリアをパイロットと事前に打合せする



ボートの目の前ブローを上げて海面に浮上する姿は潜水艦のようでもある

波のおさまった午後からは、ボートのみの搜索を行った。ロブの考えから、昨日とほぼ同じ海域で搜索を行ったが、結局この日は1頭のシロナガスクジラも見えずに終わり、僕は透明度の確認も兼ねて、ボートに興味を示して近寄ってくるアザラシの撮影をするにとどまった。水温は約17度だった。

最終日となる翌日、やはり空からの搜索も必要ということで、朝からセスナとボートに別れて行動することになった。今回、まだプロカメラマンの僕でさえ確実性のはっきりしないこのシロナガスクジラの水中撮影ツアーに果敢にも参加したゲストの染谷さんをはじめ、僕以外のメンバーが早朝からボートに乗り込み、僕はセスナからの上空搜索&撮影を選択した。プロの撮影のため、今回は僕が乗り込む側のドアを外してもらい、撮影条件を良くしてもらった。しかし、通常ならこういう撮影では、ハーネスなどでがっちり体を固定するのだが、座席には、車と同じシートベルトが一つだけなのだ。せめて、ロックのところをガムテープで固定したかったので、テープは無いかとパイロ

ットを訪ねたが「そんなの無いよ。大丈夫」と笑顔で答えられてしまった。(さすがはオージー、何につけてもオージーな性格だ)。

セスナは、ボートが搜索を続けている海域を目指した。夏とはいえ、全開のドアから吹き込む風が冷たい。それに、このドアの全開の仕方は、高所恐怖症の人には、絶対耐えられない状況だろう。

移動途中、シロナガスクジラを発見した。ボートがいる場所よりはかなり東の海域だ。場所を確認し、しばらく撮影を試みる。しかし、撮影時に旋回して、全開したドアから座る座席ごと落下してしまわないかという不安が常によぎっていた僕は、シートベルトからなかなか手を離さずに眼下に見えるクジラを撮影し続けた。良く見ると、親子だ。大きな巨体の横に、その半分くらいの大きさの子クジラを確認した。子クジラと言っても多分体長10mは下らないのだろう。しばらく親子の撮影をして、ボートのいる海域に移動した。しかし、やはりそのエリアではクジラを発見できず、親子やもう1頭のシングルクジラを発見した海域まで



戻って、無線でボートをそこまで誘導することにした。そこまでボートが移動するのに要する時間が約40分。その間セスナは僕のサイドを下にして延々と旋回を繰り返した。

やっとボートが見えたので、空港に引き返した。もし近くにいたら、僕もどこかでボートにピックアップしてもらって、撮影をすることになっていたが、あれだけ離れてしまっはまず無理なので、水中での撮影は、染谷さんに託して、後は、皆の帰りをホテルで待つことにした。待っている間もどうなっているかと気が気では無かったのだが、4時間近くのドアを外してのフライトと撮影ですっかり体力を消耗し、ベッドで寝入ってしまった。

皆がクラクションの音とともにポートマクドネルから戻ってきたのは、午後7時過ぎ。僕はベッドから飛び起きて、皆を出迎えた。「どうだった？」という問いに、ロブとアンディーは笑顔でビールを差し出した。水中

には入れたようだ。はたして染谷さんは撮影ができたのか？ 本人に聞くと、「勢いで飛び込んだのだけど、姿が見えませんでした」との解答。しかし、デジカメの映像を見ると、かすかに影が写っていた。「多分越智さんがいたら、ちゃんと撮れたんじゃないでしょうか。すごく近かったから」そういう言って染谷さんが笑った。肉眼でテールを見たとき興奮していた高島氏のビデオには、まったく何も写っていなかった。どうやら撮影ボタンを押すのを忘れたらしい。

今回、決定的な水中写真は撮影できなかったものの、次回への可能性を残してくれる成果が得られた。もっと海のコンディションが良ければ、間違いなく撮影ができたのではないだろうか。染谷さんも、「またチャレンジしたい」と決意を新たにしていた。時期シーズンには、自分も、もう少し現地に長く滞在して、シロナガスクジラの水撮影に最度チャレンジしてみようと思っている。

変わった生物の多い海域

今回、前半は風が強く、シロナガスクジラ捜索に出れない日がしばらく続いた。そんな時でも、メルボルン近海では変わった生物に遭遇できるダイビングを楽しむ事ができる。遭遇可能性の高いものからいくと、オーストラリアアザラシやウイディーシードラゴン。これらは、メルボルンのあるポートフィリップベイの浅場のポイントで簡単に出合える。メルボルンの東にあるフィリップアイランドでは、セブンギルシャークと呼ばれる、エラが片側に7つもある、現存する中では一番古いタイプのサメ(ほとんどのサメが5つしかエラを持っていない)を見ることができる。深海性で体長3メートル程、世界に2種類しか存在しないが、その中の1種類を浅場でフィーディングダイブで見ることができる。また期間は限定されるが、3月頃であれば、この海域にしか生息しないエレファントフィッシュという超レアものの魚も見物だ。

まったく海に出れない状況でも、フィリップアイランドではコアラなど、陸上のオーストラリア固有の動物や、フェアリーベンギンなどの営巣地が見れる。

このような珍しい生物にも増して魅力的なのが、海にふんだんに生息しているホタテ、アワビ、ウニ、ロブスターなどが取り方、食べ方代という事。日本では考えられない事だが、とにかく、潜るとアワビなど巨大なのがうようよい。船上で生のまま食べる取れ立てのアワビは最高だ。ダイブ

ング中も、カメラをほったらかして、アワビ取りに夢中になってしまうことが度々あった。

来シーズンのシロナガスクジラ撮影

来シーズン、3月頃に最度シロナガスクジラの水撮影を行う。ハードな内容ではあるが、プロカメラマンでもなかなか経験することのできない、シロナガスクジラとの水中遭遇を体験したいと考えている方、ファンダイビングとは違う、アドベンチャラスなダイビングを楽しみたい方は、是非WATDCの高島氏までご連絡下さい。

WATDC

ウエストオーストラリアアトラベル&ダイブセンター

<http://www.watranddive.com/japanese/diver/australia/wa/wa.html>

アクセス

日本から飛行機でオーストラリアのメルボルンへ約11時間。そこから陸路車でポートランドへ約5時間

通貨:オーストラリアドル (1A\$=¥83:2005年3月現在)

時期:シロナガスクジラのシーズンは、11月頃~4月頃まで。南半球の夏の時期

水温:内湾で約19度前後、外洋で約16度前後

電圧:220~240v/50Hz。三つ又(八の字)もOK



(左)フィリップアイランドではコアラが見られる(右)上機橋情報をむきほるオーストラリアアザラシ(下)左3月しかみられないエレファントフィッシュ(右)船上で取れ立てのアワビを食べる